

「プラマーナ・ヴールティカ」現量章の和訳研究 (20)

戸崎, 宏正

<https://doi.org/10.15017/2328593>

出版情報：哲學年報. 42, pp.1-27, 1983-01-31. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



「プラマーナ・ヴァルティカ」

現量章の和訳研究 (20)

戸 崎 宏 正

目 次

IX 量果＝自証

4 知の自証性の論証

A 「知の二相性の論証」による論証 (k. 426)

B 知は他の知によって認識されるとみなす場合の過失

a 過失 (I) —— 領納がまったくありえないことになる (k. 427)

b 過失 (II) —— われわれの直接経験に反する (k. 428)

C 対象形相をもった知の自証性をみとめない場合の過失

a 過失——「対象の認識」がありえないことになる (k. 429 abc₁)

b 敵者との対論

(1) 敵者の反論——対象相似性によって「対象の認識」といわれる (k. 429 c₂d)

(2) 論破 (I) —— 相似したものがすべて相互に認識する過失におちいる (k. 430)

(3) 論破 (II) —— 認識作用は知自身に起因する (k. 431-k. 434)

(4) 論破 (III) —— 知が知でなくなる等の過失におちいる (k. 435)

(5) 論破 (IV) —— 知が「対象を異にするのちの知」によって認識される過失におちいる (k. 436-k. 438 b)

D 受は知と異なるか否か

a 受は知と異なるとみなす場合の過失

(1) 過失——世界はすべて現われないことになる (k. 438 c-k. 440)

(2) 知は他の知によって現われるとみなす説を破す

(イ) 無窮となる (k. 441 ab)

(ロ) 「対象が知覚された」といえなくなる (k. 441 c-k. 446)

b 受は知にはかならないとみなす場合、自証性が証明される (k. 447)

4 知の自証性の論証

つぎに、知は知自身によって認識されること——知の自証性——が論証される。

〔陳那の見解〕

陳那はさきの論述につづいて、つぎのようにいう。

「(イ) また (想起にもとづいて) 自証性も (確立される)。どうしてかというならば、(以前に) 認識されていないならば、それ (=想起) は (ありえ) ないから (k. 11 d)。 (以前に) 領納されたことがなくて対象を想起することは経験的に知られない。たとえば (以前に知覚されたことのない) 色等の想起 (はない) ように。

(ロ) もし知 (甲) も色等のように他の知 (乙) によって認識されるというならば、それも合理でない。なぜならば、他の知 (乙) によって領納されるならば、無窮となろう (k. 12 ab₁)。無窮となるというのは、知 (甲) が他の知 (乙) によって領納される場合である。なぜならば、それ (乙) に対しても想起があるから (k. 12b₂)。 (すなわち) その知 (甲) が或る (他の) 知 (乙) によって領納されるならば、(しかし) それ (乙) に対しても、のちに想起があることが知られるはずであるから。それゆえに、それ (乙) に対して (も) 他の知 (丙) による領納がある (とみとめられねばならない) から、無窮となろう。

(ハ) 同様に (知が) 他の対象に移行することもありえないことになろう。しかるにそれ (=知の移行) はみとめられる (k. 12 cd)。それゆえに、かならず自らを認識する知はみとめられねばならない。

そして、それがまさに (量の) 果である。このようにして、現量は除分別であると確立される¹⁾。」

1) rañ-rig-pa ñid du yañ ño. ciñi phyir she na, gañ phyir ma myoñ-bar ñdi med (k. 11 d): ñams-su ma myoñ-bar don dran-pa ni mthoñ-ba med de, gzugs la-sogs-pañi dran-pa bshin no. ci ste

A 「知の二相性の論証」による論証

法称は、陳那に従って知の自証性を論証するまえに²⁾、法称自身の論証をなす。

まず、これまで論述してきた「知の二相性の論証」がその文脈によって、知の自証性をも知らしめることを述べる。

(知の) 自証 (性) は (以上論述した「知の) 二相性の論証」
によっても大よそ (= 文脈によって)³⁾ 確立されている。なぜ

gzugs la-sogs-pa bshin du śes-pa yañ śes-pa gshan gyis myoñ-ba yin no she na, de yañ rigs-pa ma yin te, gañ gi phyir śes-pa gshan gyis ģams-myoñ na, thug med (12 ab₁). thug-pa med-pa shes-bya-ba ģdi śes-pa śes-pa gshan gyis myoñ-bar byed naño. ci ltar she na, de lañan dran-pa ste (k. 12 b₂). śes-pa gañ dag gis śes-pa de ģams-su-myoñ-bar byed pa de la yañ phyis dran-pa mthoñ dgos-pas so. des na de la yañ śes-pa gshan gyis ģams-su-myoñ-ba yin na ni thug-pa med-par ģgyur ro. de ltar yul gshan dag la ģpho, med ģgyur de yañ ģdod-pa ģo (k. 12 cd). deñi phyir gdon mi za-bar rañ-rig-pañi śes-pa khas-blañ-bar byaño. de yañ ģbrās bu ñid de, de ltar na mñon-sum rtog-pa dañ bral-ba shes-bya-ba ģdi gnas-pa yin no. (Hattori, *Dignāga On Perception*, p. 185, ll. 27-39, p. 187, ll. 1-10.) なお、Hattori, 同書, p. 30, l. 16-p. 31, l. 4 および武邑尚邦博士、『仏教論理学の研究』, p. 194, l. 9-p. 195, l. 6 に訳出されている。

2) 陳那の論証に相応する論述は k. 485 以下である。

3) PVP, 287 a³⁻⁵: 「もし (知の) 二相性の論証 (のうち) 或るものが自証知を証明しており、そのために“大よそ”という語が用いられたのか、というならば、それはそうでない。(論証の) 対象が異なるから (“大よそ” といわれた) のである。知の二相性とは、(知が能取形相のほかに) 対象相似 (= 対象形相) を (も) 自体としていることであるが、それ (= 対象形相) も領納される (と許されよう)。それゆえに文脈によって (arthāt) (知の) 自証 (性) が確立されるのであって、直接的にではないことを示すために、“大よそ” という語が用いられたのである。」 (gal-te ci tshul gñis sgrub-par-byed-pa ģgañ-shig gis rañ-rig-pañi śes-pa ģgrub-par ģgyur na, gañ gis na

ならば、そのとき、(知の) 自相にある顕現 (=対象形相) が認識されるとみとめられるであろうから⁴⁾。

dvairūpyasādhane nāpi prāyaḥ siddhaṃ svavedanam |
svarūpabhūtabhāsasya tadā samvedane kṣaṇāt || (426)

さきに、知は能取形相と対象形相とをもって生じること——知の二相性——が論証された。ところで、このように知に対象形相があることをみとめるとき、さらに知自身にあるその対象形相が知自身によって認識されることもみとめられるであろう。そして、知自身にある対象形相が知自身によって認識されるということは、知自身が知自身によって認識されること——自証されること——にはかならない⁵⁾。このように、知の二相性の論証は知の自証性をも知らしめている。

B 知は他の知によって認識されるとみなす場合の過失

a 過失 (I)——領納がまったくありえないことになる

つぎに法称は、知は他の知によって認識されるとみなす場合の過失を指摘する。まずかれはつぎのようにいう。

知 (A) は滅しているから、どうしてそれ (A) の相をもつ
(のちの他の) 知 (B) によって領納される (といえよう)

phan-chen (phal-cher?) shes-bya-baḥi sgra byas še na, de ni ma yin te, don gshan ŋid yin-paḥi phyir te, šes-paḥi tshul gñis ni don dañ ḥdra-baḥi bdag ŋid du gyur-pa yin shiñ de yañ myoñ-ba yin-pa deḥi phyir don gyis bdag ŋid ŋams-su-myoñ-ba grub-pa yin gyi dños su ma yin no shes bstan-par-bya-baḥi don du phal-cher gyi sgra mdsad-pa yin no.)

4) kk. 426-440 は Vetter, *op. cit.*, S. 76-77 に訳出されている。

5) PVT (S), 290 a⁶: 「もし知自身にある対象相似 (=対象形相) が (知自身によって) 認識されるならば、それゆえに知 (自身) が (知自身によって) 認識されるということにもなる。」 (gal-te šes-paḥi bdag ŋid du gyur-pa doñ dañ ḥdra-ba myoñ-ba yin-pa de bas na šes-pa yañ myoñ-ba yin no shes-bya-bar ḥgyur ro.)

か。しかも(敵者の説によれば⁶⁾) それ(=のちの知⁷⁾)は自身を認識しないのであるから、(結局、対象についても知についても⁸⁾) 領納はまったくないことになるう。

dhiyā tadrūpayā⁹⁾ jñāne niruddhe 'nubhavaḥ kutaḥ¹⁰⁾ |
svaṁ ca rūpaṁ na sã vettīty utsanno 'nubhavo
'khilāḥ¹¹⁾ || (427)

6) PVV, p. 246, l. 2: tvanmate.

7) PVP, 287 b⁸: 「のちの知, それは……」(blo phyi-ma des…); PVT (R), 179 b⁶⁻⁷: blo phyi-ma de. (下線は偈.)

8) PVV, p. 246, l. 2: arthasya jñānasya ca; PVP, 288 a¹: śes-pa ḥam śes-byaḥo.

9) PV-k (I), (II), (III): dhiyā 'tadrūpayā. しかし PV-k (t) は de dños can gyi blo yis ni (=dhiyā tadrūpayā) である。PVP (287 b⁷) に含まれる偈も PV-k (t) に一致する(——相違は de が deḥi である点のみ——)。PVP はそれを「対象(とされる)知と相似(した知)によって」(PVP, 287 b⁷: yul gyi śes-pa dañ ḥdra-bas) と注釈している。これに反し, PVBh は「かの形相をもたない義準量等を自性とする“のちの知”によって」(PVBh, p. 429, l. 20: 'parayā buddhyā 'tadākārayā 'rthāpattiyā-dirūpayā=don-go-ba la-sogs-paḥi rañ-bshin deḥi rnam-pa can ma yin-paḥi blo gshan gyis) と注釈しているから, dhiyā 'tadrūpayā とみていることは明らかである(PVBh に含まれる偈の Tib. 訳も de dños can min blo yis=dhiyā 'tadrūpayā である)。PVT (R) に含まれる偈は PV-k (t) に一致する(——ただし de が deḥi となっている——)が, その注では dhiyā tadrūpayā と dhiyā 'tadrūpayā との両方の意味をくみ取っているようである。すなわち, 「のちに生じる知によって, すなわちさきの知を自性とする(知), あるいは(その)形相をもたない義準量を自性とする(知)によって」(PVT (R), 279 b⁵⁻⁶: dus phyis ḥbyuñ-baḥi blos blo sñamaḥi rañ-bshin nam, rnam-pa med-par don gyis go-ba la-sogs-paḥi ño-bos) と注釈している。PVV (p. 245, l. 24) は dhiyā 'tadrūpayā 'grāhyajñānasvarūpayā であるが, これは本来 dhiyā tadrūpayā grāhya-jñānasvarūpayā であった可能性もあって, Manorathanandin の見解は判然としない。いまは PVP に従った。

10) PV-k (II): katham; PV-k (I), (III): kutaḥ.

11) PV-k (I), (III): 'rthinaḥ; PV-k (II): 'khilāḥ; PV-k (t): ma lus

敵者は、知（A）は知自身によって領納されるのではなく、知（A）の相をもって生じるのちの知（B）によって領納される、というかもしれない。しかし知（A）が知（B）によって領納されることはありえない。なぜならば、知はすべて刹那滅であって、知（B）の時点には知（A）は滅して存在しないから¹²⁾。しかも敵者の見解によれば、知（B）は知（B）自身によって領納されないはずであるから、結局、知はすべて領納されないことになる¹³⁾。知が領納されないならば、対象も領納されないことになる。したがって、知についてであれ、対象についてであれ、領納がまったくありえないことになる。それは事実に反する。

b 過失（II）——われわれの直接経験に反する

なおまた、知が知自身を領納しないということは、われわれの直接経験に矛盾する¹⁴⁾。すなわち、

また、対象顕現（＝対象形相）をもったかの知は、外に向って現われる。しかし、知を把握する知は常に自身において内に向って現われる。

bahirmukhañ ca tajjñānaṃ bhāty arthapratibhāsavat |
buddheś ca grāhikā buddhir¹⁵⁾ nityam antarmukhā-
tmani || (428)

自身のなかに対象形相をもった知は外に向って現われる。たとえば、青形相を自身のなかにもった知は「青（外境）の知」として現われる。換言すれば、知自身にある対象形相があたかも外境にある所取のように現われ

(=akhilāḥ).

12) 知（A）が知（B）によって認識されないことは、別の観点から、 k. 327 bcd; k. 441 ab-k. 446; k. 478-k. 483; k. 485-k. 541 に論じられている。

13) 知（B）がさらに他の知（C）によって領納されるというならば、知（C）についてもさらに他の知（D）が必要となり、無窮となるであろう。

14) PVP, 288 a²: gshan yañ blos bdag ñid ñams-su-myoñ-ba ma yin no shes-bya-ba de yañ mñon-sum dañ ḡgal-ba yin no. de ltar na...

15) PV-k (II): vittir; PV-k (I), (III): buddhir.

る。これに反して、知を把握する知は常に内に向って現われる。つまり把握される知は知自身のなかに内在的に現われる。決して知自身より外のものとして経験されない。このことは、われわれが直接経験する明晰な事実である。ところで、もし知が他の知によって認識されるのであれば、それは青等のように外在的に現われるはずである¹⁶⁾。このように、知が他の知によって認識されるという主張は、上述のような、われわれの直接経験に明晰な事実と矛盾することになる。したがって、知は知自身によって自覚される——自証される——とみなされるべきである。

C 対象形相をもった知の自証性をみとめない場合の過失

a 過失——「対象の認識」がありえないことになる

さきに第 426 偈において、「知の二相性の論証」によって知の自証性も大よそ確立される、といわれた。しかしその場合、「知の二相性の論証」といっても、知が能取形相をもつことは誰れにも異論のないところであるから、その論証はもっぱら知が対象形相をもつことの証明に向けられてきたのである。したがって、第 426 偈の実質的な意味は、「知が対象形相をもつことの論証」によって知の自証性も大よそ確立されている、ということである。

法称はいま、対象形相をもった知が自証することをみとめない場合の過失を指摘する。

(もし) 対象顕現 (= 対象形相) をもったそれ (= 知) が (自身を認識しないのであれば¹⁷⁾, それは) それ (= 対象) を認識

16) PVV, p. 246, ll. 11-12: 「しかも、もし知が他の知によって把握されるのであれば、(前者は) 青等のように、あるいは想起される過去の自分の知のように、能取形相 (ではなく、それ) より外のものとして現われるはずである。」
(yadi tu buddhyantaragrāhyā* buddhiḥ syāt tadā nilādivat smaryamāṇātītasvabuddhivac ca grāhakākāratvād bahiṣṭvenāvabhāseta.
*テキストの 'grāhikā を文脈によって訂正した。なお出版者はこの文をつぎの偈に属せしめているが、訂正されるべきである。)

しない、ということにもなるであろう。

yo yasya viṣayābhāsaḥ tam vetti na tad ity api |
prāptam¹⁸⁾

直前の偈に述べられたように、知自身のなかの対象形相が所取として外在的に現われる。それは別言すれば、知自身のなかの対象形相が外的存在として執されることである。そして実はそのことこそが「対象の認識」と表現されるのである¹⁹⁾。ところで、もし知が認識されないならば、知自身にある対象形相も認識されないはずである。もしそうであれば、その対象形相を外的存在として執すること——つまり「対象の認識」——もありえないことになる。したがって、知は認識されるとみとめねばならない。しかも、他の知によって認識されるという考えは、さきに指摘されたような過失があるから、知は知自身によって認識されるとみとめるべきである。そのようにみとめることによって、はじめて、対象形相の認識もみとめられ、したがって、「対象の認識」ということも合理となる²⁰⁾。

b 敵者との対論

(1) 敵者の反論——対象相似性によって「対象の認識」といわれるこの法称の見解に対して反論がつぎのように予想される。

もしそれ (=対象) との相似性より他にいかなる認識作用があ

17) PVP, 288 a⁷: 「なおまた、対象相似性をもった (知) が自身を領納しない、(とみなす) 場合、……。」 (gshan yañ don dañ ḥdra-ba bdag ŋid ŋams-su-mgoñ-ba ma yin na…); PVV. p. 246, l. 12: tathā svaveda-natābhāve.

18) PV-k (I), (II), (III): prāptā. PV-k (I) の出版本の note によれば、*Ṣhalu* 僧院に属する Ms. (PS と略される) では prāptam である。PVV, p. 246, l. 16 から prāptam と思われる。

19) Cf. kk. 328; 338, 339; 346; 348 cd, 349 ab; 432.

20) PVT (R), 180 a⁸: 「自証されるとき、対象形相は領納され、『対象の認識』ということが合理となる。」 (rañ-rig-pa yin na ni yul gyi rnam-pa ŋams-su-myoñ na don myoñ ño shes brjod-par rigs so.) Cf. PVP, 288 a⁸.

ろうか、(決してない) と考えるならば²¹⁾、

kā saṃvid anyā 'sti tādrūpyād iti cen matam || (429)

反論はこうである。「対象の認識」とは知が対象に相似して生じること(対象相似性)——別言すれば、対象の形相を帯びて生じること(対象形相性)——にほかならないのであって、他に認識作用(saṃvid)なるもの——したがって、自己認識作用(自証)——をみとめる必要はない、と²²⁾。

21) PVP, 288 b¹⁻²: 「対象との相似性 (= 対象形相性) より他に、領納すること自体を本質とする認識作用(saṃvid)が存在することはない。それでは、どのようにして(対象の領納はあるの)か、というならば、(対象の)領納は対象との相似性のみによってある』というならば、……。」(don dañ ḥdra-ba las ṇams-su-myoñ-baḥi bdag ṇid can gyi ṇo-boḥi myoñ-ba gshan yod-pa ma yin no. ḥo-na ci yin she na, don dañ ḥdra-ba tsam gyis don ṇams-su-myoñ-ba yin no she na, …) PVT (R), 180 b¹ もほぼ同様にいう。PVV は偈の kā saṃvid anyā 'sti と tādrūpyād iti cen matam とを区切り、前分は法称自身の説であり、後分は敵者の反論であるとみているようである。すなわち、「なぜならば、対象の自相 (= 対象形相) をもった知を認識する(自証)より他にいかなる『対象の認識』があろうか。もし『対象の認識』はそれとの相似性, i. e. 対象との相似性——(それは)自証ではない——, によるのである』と考えるならば、……。」(PVV, p. 246, ll. 17-18: yato 'rthasvarūpadhīvedanād anyā kā saṃvid arthasyāsti. tādrūpyād viṣayasārūpyād asvasaṃvedanād arthasya saṃvid iti cen matam, …) という。いまは PVP に従った。

22) 法称は k. 307 ab-k. 309 (拙著上巻, pp. 400, 401) において、外境実在論(経量部説)に立って、「対象の認識」は知が対象の形相をもって生じること——別言すれば、知が対象に相似して生じること——にほかならない、と主張している。しかし、法称は k. 319 までに外境実在論に立って論述したのち、k. 320 以下では、より高次の立場——それは唯識説に立つ場合と外境実在論に立つ場合とがあるが——から余論を展開してきた(拙著上巻, 第1部, 第1章参照)。そのより高次の立場では、「対象の認識」の本質は自証である。つまり、知が知自身に認識するとき、その知にある対象形相——それは唯識説では内的要因によるのであり、外境実在論では外境対象から与えられたものとみなされる——があたかも外境存在のように執される。そのことが「対象の認識」と表現される(cf. 前注(19))。いま、ここで問題とされる敵者の見解は、

(2) 論破 (I)——相似したものがすべて相互に認識する過失におちいる
そこでこの反論を論破する。

相似したものがすべて互いに認識することになる。

prāptam samvedanaṃ sarvasadṛśānāṃ parasparam |

知でなくても、相似したものであれば、すべて互いに認識することになる。
それは不合理である。

そこで、

もし相似する知であるとき、それ (= 対象) を認識する、とい
うならば、その場合、認識は相似性を本質とする (とはいえ)
ない。

buddhiḥ sarūpā²³⁾ tadvic cet nēdānīm vit sarūpikā ||

(430)

もし相似しているのみでは「認識」とはいえないのであって、相似する
それが知であって始めて「認識」なのである、というならば、「対象の認
識」の本質は、対象との相似性にあるのではなく、知の認識作用 (anu-
bhava) そのものにあるというべきである。

(3) 論破 (II)——認識作用は知自身に起因する

しかも、

それ (= 知) の認識作用は自から (生じるの) であって、それ
は相似性を因とするのではない。

svayaṃ so 'nubhavas tasyā na sa sārūpyakāraṇaḥ |

認識作用が対象との相似性によって生じるということとはありえない。そ
れは知自身に起因するはずである。

法称が k. 307 ab-k. 309 にのべた説にのみとどまっていて、より高次の立場か
らの自証説をみとめないのである。

23) PV-k (I): svarūpā; PV-k (II), (III): sarūpā.

24) PVT (R), 181 a⁴: ḥo na gal-te blo rañ űid* űams-su-myōñ-ba yin
na*, ḥdra-bas ci* shig bya she na, ... (* の箇所はそれぞれ Cone ed.
によって訂正.)

敵者からの反論が予想される。では対象相似性は知に対して何ら効用をなさないのであろうか、と²⁵⁾。この反論に対してつぎのように答えられる。

それ (=対象相似性) は、(外境対象の存在をみとめる)²⁶⁾ 世間において、(認識) 作用 (を) 対象 (に应じて) 決定する因 (とみとめられる) であらう。

kriyākarmavyavasthāyās tal loke syān nibandhanam ||
(431)

唯識説に立つ場合は、外境存在は承認されないから、「(外境) 対象との相似性」はまったく問題にならない。しかし、外境対象の存在をみとめる世間的立場に立つとき、「対象との相似性」は、認識を対象に应じて決定する因とみなされる。たとえば、或る知が「青の知」であって「黄の知」でないで決定するのは、その知が対象“青”の形相を帯びて——別言すれば、対象“青”と相似して——生じているということである²⁶⁾。

では、知の認識作用 (anubhava) は知自身に現われている対象形相を認識する——自証する——のであるのに、どうして「外境の青等を認識する」といえるのか²⁷⁾。このことについて、つぎのようにいわれる。

(知の) 自性にあるかの相を認識しているのに、「青等の認識」といわれるのは、(それを外境対象の認識と) 仮託する惑乱のゆえである。他の自体 (=外境の青等) を(実際に) 認識するからではない。

svabhāvabhūtadrūpasamvid āropaviplavāt |
nīlāder anubhūtākhyā nānubhūteḥ parātmanaḥ || (432)

25) PVP, p. 247, l. 8: loke (偈) bahiradhyavasāyini.

26) Cf. k. 302-k. 305 (拙著上巻, pp. 397-399).

27) PVP, 288 b⁷⁻⁸: gal-te* űams-su-myoñ-baḥi bdag űid kyis gsal-ba űams-su-myoñ-ba yin-pa* ciḥi phyir de* sñon-po la-sogs-pa phyi-rol űams-su-myoñ-ba yin no shes tha-sñad du byed ce na, ... (*Peking ed. では gal-te, yin-pa, de はないが、Cone ed. によって補った:)

「外境対象の認識」といわれるが、それは知が外境対象を実際に把握するからではない。知が外境対象を把握するということは実際にはないのである。実際に起こる事実は、知自身のなかにある対象形相をその知自身が認識する——自証する——ということである²⁸⁾。しかし人々はそれをあたかも外境対象の認識であるかのように思い込む²⁹⁾。その誤った思い込みのゆえに、「外境対象の認識」といわれるのである。それゆえに、知は勝義にはまさに自証であって、「外境対象の認識」ではない³⁰⁾。

さらには、外境対象それ自体の存在も、それを知る手だては何もない。すなわち、

(勝義には³¹⁾知は青等の相をもつ(ものとして自証される³²⁾)
が、(しかし) 外境対象(の存在)はいかなる量によって(知
られる)であろうか。

dhiyo nīlādirūpatve bāhyo 'rthaḥ kiṃpramāṇakaḥ |

勝義には、知にある青等の相(対象形相)は知自身によって自証されるが、しかし知の領域外に対象が存在することを確認するいかなる手だてもない。

敵者は逆に、外境対象のみが形相をもち、知は無形相(nirākāra)である³³⁾、というかもしれない。しかし、

28) 厳密に言えば、「知は自らを認識する」ということもできない。知は顕照(prakāśa)を本性として生じるのみであるが、それを比喻表現によってそのように表現するのである。Cf. k. 329 (前稿(16), pp. 40, 41)。

29) Cf. k. 338-k. 340; k. 348 c₂-k. 349 ab.

30) PVT (R), 181 a⁸: deḥi phyir don-dam-par na rañ-rig-pa űid yin gyi, don myoñ-ba ni ma yin no; PVBh, p. 432, l. 17: paramārthatas. tu svasaṃvedanam eva kevalam. Cf. k. 351 (前稿 17, 注(45))。

31) PVV, p. 247, l. 17: paramārthatas.

32) PVV, p. 247, l. 17: nīlādirūpatve (偈) svasaṃvedye.

33) PVV, p. 247, l. 20: bāhya evākāravān dhīs tu nirākārēti.

知が青等の相をもたないならば、どうしてそれが「それ (= 青等) の認識」(といえる) であろうか³⁴⁾。

dhiyo 'nīlādirūpatve sa tasyānubhavaḥ katham || (433)

知がたとえ青の形相をもたないならば、それが「青の認識」と呼ばれる根拠を失うことになるう。

このように、勝義には外境対象の存在については何ら確証はない。ただ青等の形相をもった知が認識者本人に自覚されるのみである。したがって、認識が外境対象との相似性に起因するとはいえない。それゆえに、

認識それ自体であることが相似性に起因しない場合、それ (= 認識それ自体であること) は自らによってのみ成立する。 (したがって) 対象によって何がそれ (= 知) に与えられるであろうか。

yadā saṃvedanātmatvaṃ na sārūpyanibandhanam |

siddham tat svata evāsy kim arthenōpanīyate || (434)

このように、外境対象は「対象の認識」の生起に何ら関与しないのである。それゆえに、「対象の認識」が相似性に起因するとどうしていえるであろうか³⁵⁾。

34) Advayavajra の Tattvaratnāvalī の有相唯識説を述べる箇所 (宇井伯壽博士、『大乘仏典の研究』, p. 4; 訳 p. 34) で, (Dharma-) kīrtipāda の言葉として, この第 433 偈に近似した偈が引用されている。すなわち,

dhiyo nīlādirūpatve bāhyo 'rthaḥ kiṃnibandhanāḥ |

dhiyo 'nīlādirūpatve bāhyo 'rthaḥ kiṃnibandhanāḥ || (14)

(sño sogs ŋo-bo blo ŋid na | phyi yi don gyi rgyu ci shig |

blo ŋid sño sogs ma yin naḥaṅ | phyi yi don gyi rgyu ci shig |)

この引用偈と第 433 偈は第 2 pāda と第 4 pāda に相違がある。しかし, 第 2 pāda の kiṃnibandhanāḥ と kiṃpramāṇakaḥ は意味上の相違はなく, また第 4 pāda の bāhyo 'rthaḥ kiṃnibandhanāḥ と sa tasyānubhavaḥ katham とは同じ意味内容に解することも可能であろう。

なお, 第 433 偈 ab は Vyomaṭī (comm. on the Praśastapādabhāṣya), Ch. S. S., p. 525 に引用されている (——竜大・大学院生, 下田浩明氏の教

(4) 論破 (III)——知が知でなくなる等の過失におちいる

なおまた、

全体的に相似しているならば、知が知でなくなるであろう。

また、部分的に相似しているならば、すべて（の知）がすべて（の対象）を認識することになる。

sarvātmanā hi sārūpye jñānam ajñānatām vrajet |
sāmye kenacid aṃśena syāt sarvaṃ sarvavedanam³⁶⁾ ||
(435)

知と対象とが相似しているというとき、それは全体的に相似しているのか、あるいは部分的に相似しているのかのいずれかであろう。そのうち、前者の場合は、知は対象と同じく非知であることになる。また 後者の場合、あらゆる知とあらゆる対象は何らかの点で相似しているはずであるから、すべての知がすべての対象を認識することになる³⁷⁾。

それゆえに、「対象の認識」が相似性に起因するとは是認できない³⁸⁾。

示による——) が、そこでは bāhyārthaḥ kimnibandhanaḥ である。

35) PVV, p. 248, l. 4: tat katham arthavedanam anenēty ucyate.
(anena=sārūpyena.)

36) ŚVK, ŚVN, ŚVV ad ŚV, Śūnyavāda, k. 20 および TS, k. 2039 に引用（——多少の variants をもつが——）されている (cf. 海恵宏樹氏, 「Ślokavārttika の闡説する仏教説」, インド学試験論集, No. 1, p. 38, p. 39, nt. 8). なおいま PV-k (I), (III), (t) に従ったが, PV-k (II): na ca sarvātmanā sāmyam ajñānatvaprasaṅgataḥ | na ca kenacid aṃśena sarvaṃ sarvasya vedanam ||. PVP, 289 b³⁻⁵ から PV-k (I), (III), (t) の如くである。

37) たとえば、「瓶の知」と「布」とは実有性 (vastutva, PVV, p. 248, l. 10; PVT (R), 182 a⁵), 所知性等 (PVP, 289 b⁵) において相似するから、「瓶の知」が「布」を認識することになる。あるいは、「特定の青 (A) の知」と「すべての青 (B, C…)」とは青性 (PVV, p. 248, ll. 10-11) において相似するから、「青 (A) の知」はすべての青 (B, C…) を認識することになる。

38) PVP, 289 b⁷⁻⁸: de bas na don āmas-su-myoṇ-ba ḥdra-bas byas-pa ma yin no.

(5) 論破 (IV)——知が「対象を異にするのちの知」によって認識される過失におちいる

なおまた³⁹⁾,

(知が) 青等の相をもつから「青等の認識」と考えられるように、同様に (他を対象とするのちの知も⁴⁰⁾) 認識の相をもつから、それ (=さきの知⁴¹⁾) を認識することになるう⁴²⁾。

yathā nīlādirūpatvān nīlādyanubhavo mataḥ |

tathānubhavarūpatvāt tasyāpy⁴³⁾ anubhavo bhavet ||

(436)

もし知が青の相をもつから——別言すれば、青と相似するから——「青を認識する」のであれば、黄を対象とするのちの知も「さきの青の知 (等無間縁の知) を認識する」ことになるう。なぜならば、のちの知もさきの知も認識を相としている——つまり、のちの知はさきの知の相をもっている——から。しかし、「黄を対象とするのちの知」が「青を対象とするさ

39) PVP, 289 b⁸: gshan yañ. Ravigupta はつぎの偈は「或るもの (甲) から生じ、それ (甲) の形相をもつとき、(知は) 青等 (甲) の或る部分と (相似する、といわれる)。知はすべての対象から生じない。それゆえに、すべて (の知) がすべて (の対象) を認識することにはならない」(PVT (R), 182 a⁵⁻⁶: ḥon te gañ las skyes-pa dañ deḥi rnam-pa can ni sñon-po la-sogs-paḥi cha ḥgaḥ-shig gis yin gyi, śes-pa don thams-cad las skyes-pa ni ma yin no. de bas na thams-cad thams-cad kyī rig-par-byed-pa ma yin no.) という反論に答えるものとみている。Prajñākaragupta も同様に解しているようである (PVBh, p. 433, l. 16).

40) PVP, 290 a¹: gshan gyi yul can gyi phyis kyī ḥams-su-myoñ-ba yañ; PVV, p. 248, l. 15: uttaraṃ jñānam; PVT (R), 182 a⁸: śes-pa phyi-ma.

41) PVP, 290 a¹: śes-pa sñā-ma; PVV, p. 248, l. 15: tasyānubhavaśyārthaviśayasyāpi. (下線は偈.)

42) Cf. k. 323 (前稿 (16), p. 35).

43) PV-k (I), (III): tulyo 'py; PV-k (II): tasyāpy; PV-k (t): de yañ (=tasyāpy).

きの知」を認識することはありえない。それゆえに、「対象の認識」が相似性に起因するとは是認できない⁴⁴⁾。

敵者の反論が予想され、それが論破される。

もし対象のように「知が認識された」という決知がない(から)、それゆえに過失(=知が対象を異にするのちの知によって認識されることになるという過失)はない、というならば、(それは正しくない。なぜならば、)対象についても、それ(=「認識された」という決知)はあらゆる場合に(あるとはかぎらず)ない(から)。

nānubhūto 'nubhava ity arthavat tadviniścayaḥ⁴⁵⁾ |
tasmād adoṣa iti cet nārthe 'py asty eṣa sarvadā ||
(437)

あるいは、知に対して(決知が)存在する因があるのに、どうして(決知が)ないであろうか。

kasmād vā 'nubhave nāsti sati sattānibandhane |

敵者の反論はこうである。「対象の認識」がみとめられるのは、(i) それ(対象)から生じ、(ii) それ(対象)と相似し、さらに加えて(Ⅲ) 「この青等はわれによって認識された」というように、対象についての決知があるからである⁴⁶⁾。しかし、「知の認識」——さきの知を対象を異にするのちの知が認識する——については、(i) と (ii) の条件は備わっているが、(Ⅲ) の条件が欠けているから、「知の認識」はないのである、と。

この反論に対する法称の論ばくは、つぎの二点である。

44) PVP, 290 a²: de bas na űams-su-myoñ-ba ḥdra-bas byas-pa ma yin no.

45) PV-k (II): arthavad hi°; PV-k (I), (III): arthavat tad°.

46) PVP, 290 a⁴: de las byuñ-ba dañ ḥdra-ba dag yod na yañ sñon-po la-sogs-pa ḥdi kho-bos űams-su-myoñ ño don la rnam-par-ñes-pa las yin te.

まず、敵者は、「対象の認識」は上述の (iii) の条件をも備えているからありえる、といったが、しかし、「対象の認識」がすべていかなる場合でも (iii) の条件を備えているわけではない。決知がない場合もある⁴⁷⁾。したがって、決知の存在が「対象の認識」の必須条件であることはない。

つぎに、敵者は知について「認識された」という決知がないといったが、しかし知についてもそのような決知があってしかるべきである。すなわち、「対象の認識」の場合、(iii) は (i) と (ii) とがあるときにある。つまり、(i) と (ii) とが (iii) の因 (nibandhana) である。ところで、「さきの知」に対して「対象を異にするのちの知」は、(i) 「さきの知」から生じること、そして (ii) 「さきの知」と相似していることを備えている⁴⁸⁾。したがって、(iii) 「『さきの知』は認識された」という決知が生じる条件は、「対象の認識」の場合と同様に備っている⁴⁹⁾。したがって、知は「認識された」と決知されないとはいえないはずである。

以上、第 429 偈 c₂ 以下に論じられてきたように、「対象の認識」が相

47) Devendrabuddhi はつぎのような例を挙げている。「或る一つの対象に対して知が連続して生じる場合、各刹那の対象が『これは認識された』と決知されることはないであろう。」(PVP, 290 a⁵⁻⁶; yul gcig hgaḥ shig tu rgyun gyis ḥbyuñ-ba can gyi śes-pa dag la skad-cig-ma re re don ḥdi* ṇams-su-myoñ-ba yin no shes-bya-baḥi ṇes-par mi ḥgyur ro. *Peking ed. には ḥdi を欠くが、Cone ed. によって補った。) Manorathanandin も同様にいう (PVV, p. 248, ll. 21-22: na hi dhārāvāhiny arthajñāne 'rtheṣu pratikṣaṇam anubhūtanīścayaḥ). つまり、一相続の対象を連続して知覚するとき、その各刹那において決知する時間的予猶がない、という意味であろう。

48) 「さきの知」は「のちの知」の等無間縁である。また前者も後者も認識を相としている点で相似している。

49) PVV, p. 249, ll. 4-5: 「まさに (i) (それと) 相似していること、(ii) それから生じることが、対象について『(それが) 認識された』(という決知の) 因であるが、その知についても同様である。」(arthe 'py anubhūtanibandhanā sārūpyatadutpattī eva te tajjñāne 'pi samāne.) Cf. PVP, 290 b¹⁻³.

似性に起因するとは是認できない。それはまさに自らに起因するとみとめるべきである⁵⁰⁾。

D 受は知と異なるか否か

a 受は知と異なるとみなす場合の過失

(1) 過失——世界はすべて現われないことになる

つぎに法称は、別の観点から知の自証性を論証する。まず論証の出発点を示す。

なおまた、白等を知覚するとき、人間には白等の現われを相とする受が現に鮮明に現われる。(ところで)それは「白等の顕現」とは異なったものであるか、あるいはそのものであるか。

api cēdaṃ yad ābhāti dṛśyamāṇe sitādike || (438)
pūṃsaḥ⁵¹⁾ sitādyabhivyaktirūpaṃ saṃvedanaṃ sphu-
ṭam |
tat kiṃ sitādyabhivyakteḥ pararūpaṃ athātmanaḥ ||
(439)

人間が白等を知覚するとき、かれには白等の現われを相とした受(sam-vedana)——一種の心現象——が鮮明に現われる。これは人々の疑いのない経験である。ところで、その受はいわゆる「白等の顕現(abhivyakti=知)」といわれるもの⁵²⁾とは異なったものなのか、あるいはその受

50) PVP, 290 b³: deḥi phyir ḥdra-baḥi dbaṅ gis ṇams-su-myoṅ-ba ma yin gyi, ḥon kyaṅ raṅ ṇid las yin no.

51) PV-k (III): pūṃsām; PV-k (I), (II): pūṃsaḥ.

52) PVBh, p. 434, l. 26: 「汝がみとめる『白等の顕現』」(sitādyabhivyaktir bhavato 'bhimatā.) 復注釈者 Yamāri によれば、それは「パラモンや Nai-yāyika 等によってみとめられるものであって、のちの知——義準量(arthāpatti) 等——を能成としてもつもの」(bram-ze daṅ rigs-pa can la-sogs-pas ḥdod-pa śes-pa phyi-ma don gyis go-ba la-sogs-paḥi sgrub-byed can no. 418 b⁴⁻⁵) である。ちなみに、Śabaravāmin は「(対象が) 認識されるとき、(知は) 比量によって知られる」(SBh, p. 7, l. 26: jñāte tv

こそが「白等の顕現 (= 知)」といわれる そのものなのか、逆に言い換えれば、いわゆる「白等の顕現 (= 知)」といわれるものは、認識者当人に鮮明に現われる「白等の現われを相とした受」とは別のもの——したがって認識者当人に直接現われない不可見 (parokṣa) のもの——であるのか、あるいはその「受」そのもののことであるのか。

法称はこのような二つの見解を示したのち、以下まず前者の見解を破し、つぎに (k. 447) 後者の見解に立てば、知の自証性が証明されることを述べる。

もし異なったものであるならば、「顕現」は現われない (= 不可見である) (はずな)のに、どうして白が (認識者当人に) 現われるであろうか。「顕現」とは知である。(しかも、敵者の見解によれば、) それは (認識者に) 現われない。したがって、世界はすべて (かれに) 現われないことになるう。

pararūpe 'prakāśāyāṃ vyaktau vyaktaṃ kathaṃ sitam |
jñānaṃ vyaktir na sā vyaktēty avyaktam akhilaṃ
jagat || (440)

もし「顕現」(vyakti, abhivyakti) が「白等の現われを相とする受」——それは認識者当人に鮮明に経験される——より別個のものであれば、そのような「顕現」は当人には現われないものであるはずである。このように「顕現」が当人に現われないとき、どうして白等がかれに現われるであろうか⁵³⁾。さらには、「顕現」とは知にはかならないが、もし「顕現」

anumānād avagacchati) という。なお Kumārila はいう：——「げにまさにその場合、これ (= 知) の認識は義準量によって起こる。」(ŚV, Śūnyavāda, k. 118 cd: tādāiva hy asya samvittir arthāpattyōpajāyate.)

53) ちなみに、Vidyākaraśānti の Tarkasopāna (ed. by N. P. Chakravarti, Minor Buddhist Texts, Part I & II, 1978, p. 282, ll. 25-28) において、つぎの論式が示されている。

(因の第2相・比喻) 或るもの (甲) を顕現せしめるものが (認識者当人に) 現われないとき、それ (甲) は現われない。 (yad avyaktavyaktikaṃ

すなわち知がかれに現われないならば、白等のみならず全世界がかれにまったく現われないことになる。

(2) 知は他の知によって現われるとみなす説を破す

(イ) 無窮となる

そこで敵者は、「顕現 (= 知)」は対象を知覚するときに自ら認識者当人に現われることはなく、のちの他の「顕現 (= 知)」によって現われる、というかもしれない。そこで、そのようにみなす場合の過失を指摘する。

また「顕現」が他の「顕現」によって現われる(という)ならば、(それは正しくない。なぜならば、無窮となる⁵⁴⁾ 過失におちいるから。

vyakter vyaktyantaravyaktāḥ api doṣaprasaṅgataḥ⁵⁵⁾ |

もし「顕現 (= 知)」がのちの他の「顕現 (= 知)」によって現われるのであれば、その他の「顕現 (= 知)」が現われるために、さらに他の「顕現 (= 知)」が必要となる。したがって、無窮 (anavasthā) となる。

na tad vyaktam.) 何であれ、どこでもどのようにしても顕現せしめるものが現われないもののよう。 (yathā kimcit kadācit kathamcid avyaktavyaktikam.)

(因の第1相) 瓶等の対象は、知が不可見であるとき、顕現せしめるものが現われない。 (avyaktavyaktikaś ca jñānaparokṣatve ghaṭādir artha iti.)

(結論) (瓶等の対象は、知が不可見であるとき、現われない。)

(Tarkasopāna にこの論式があることは、桂紹隆博士の教示によって知った。なおほぼ同じ論式が PVP, 291 a³⁻⁵ にもみられる。)

- 54) PVP, 291 b³: thug-pa med-pa yin; PVV, p. 249, l. 19: anavasthā; PVT (R), 183 b⁸: thug-pa med-par thal-bar ḥgyur ro; PVBh, p. 435, l. 13: anavasthā.

- 55) PV-k (I), (II), (III) はいずれも api doṣaprasaṅgataḥ であるが、PV-k (t) は thug-pa med-par thal ḥgyur phyir であり、PVT (R) および PVBh に含まれる偈の Tib. 訳でもほぼ同じである。それによれば、anavasthāprasaṅgataḥ であろう。

それゆえに、「顕現 (= 知)」はまさに自らによって現われる——自証される——とみなすべきである⁵⁶⁾。

(ロ) 「対象が知覚された」といえなくなる

さらに他の過失を指摘する。

あるいは、知との関係が知られない (白等の対象) をどうして (人は) それ (= 知覚) によって限定する (= 「これは知覚された」と限定する⁵⁷⁾) であろうか。

dr̥ṣṭyā vā⁵⁸⁾ 'jñātasambandham viśiṇaṣṭi tayā katham ||
(441)

(なぜ対象と知との関係が知られないのか、といえ⁵⁹⁾、それは) 両者のうち一方が認識されるとき他方が認識されないからである。関係している両者が (同時に⁶⁰⁾) 認識されるとき、
「(対象は) 知覚された」という決知があるであろう。

yasmād dvayor ekagatau na dvitīyasya darśanam |
dvayoḥ saṃsr̥ṣṭayor dr̥ṣṭau syād dr̥ṣṭam iti niścayaḥ ||
(442)

もし敵者のいうように、知 (A) がのちの他の知 (B) によって認識されるのであれば、対象を把握する知 (A) はまさに対象を把握する時点には認識されないはずである。また、知 (A) を知 (B) が把握する時点には、対象はすでに滅して存在しない。したがって、対象と知 (A) とは同時に認識されないはずである。ところで、両者が同時に認識されて始めて

56) PVP, 291 b⁵: 「それゆえに、自証が確立される。」 (de bas na rañ-rig-pa grub-pa yin no.) PVT (R), 183 b⁵: 「それゆえに『顕現』は自証を本質とする。」 (de bas na gsal-ba ni rañ-rig-paḥi ño-bo ñid de.)

57) PVV, p. 249, ll. 22-23: katham viśiṇaṣṭi (偈) pratipattā dr̥ṣṭo 'yam iti. Cf. PVP, 291 b⁷⁻⁸; PVT (R), 184 a².

58) PV-k(III): cājñā°; PV-k(I),(II): vā 'jñā°.

59) PVV, p. 249, l. 24: katham artho dr̥ṣṭyā 'jñātasambandha ity āha.

60) PVV, p. 250, l. 2: 「一つの認得によって」 (ekopalambhāt); PVP, 292 a³: dus mtshuñs-par ḥbyuñ-ba can.

両者の関係は知られ、そして「対象は知覚された」と決知することも可能なのである。しかし、敵者の見解によれば、上述のように両者は同時に認識されえないはずであるから、それは不可能である。しかも、「対象は知覚された」という決知は現実にはあるから、敵者の考え——知がのちの知によって現われる、という——考えは否定されねばならない。

ここで、敵者の反論が予想される。

もし或る（対象）と同じ相をもった知覚が他の知によって認識されるとき、そ（の対象）について「知覚された」と表現される、というならば、

sarūpaṃ darśanaṃ yasya dṛśyate 'nyena cetasā |
dṛṣṭākhyā tatra cet⁶¹⁾

敵者の反論はこうである。「対象は知覚された」と決知されるのは、対象と知覚との 両者を同時に一緒に認識するときではない⁶²⁾。そうではなくて、対象と同じ相をもった知覚——別言すれば、対象形相をもった知覚——を他の知によって認識するとき（——そのとき対象それ自体はすでに滅して認識されないが——）である。

この反論に対して、つぎのように答える。

それ（＝知）が（対象と）同じ相をもつならば、（むしろ知の）自証が確立される（べきである）⁶³⁾。

siddhaṃ sārūpye 'sya svavedanam || (443)

61) PV-k (II): dṛṣṭākhyēti na cet; PV-k (I): dṛṣṭākhyā tan na cet; PV-k (III): dṛṣṭākhyā tatra cet; PV-k (t): de la mthoñ shes brjod ce na (=dṛṣṭākhyā tatra cet). PVP, PVV, PVT (R) から PV-k (III) のごとく読むべきである。

62) PVP, 292 a⁴: yul dañ de la dmigs-pa gñis cig-car tshogs-pa na mthoñ-ba la* mthoñ ño shes ñes-pa ma yin gyi, ... (*Peking ed. には mthoñ-ba la が無いが, Cone ed. によって補った。) Cf. PVT (R), 184 a⁷⁻⁸.

63) Cf. k. 426.

対象と同じ相——対象形相 (arthākāra)——が知にあるならば、むしろ知の自証性こそがみとめられるべきである。すなわち、まさにその知のときに対象形相は鮮明に認識される（——このことは誰れにも否定できないことである——）が、もしその対象形相が知に内在するのであれば、まさに対象形相が認識されるとき、同時に知自身も認識されるはずである。知はのちに生じる他の知によって認識されるのではない⁶⁴。つまり、対象形相をもった知は知自身によって認識される——自証される——というべきである。

もし（対象形相をもった知が）自らの相を認識しないのであれば、どのようにして「他の相（＝外境の相⁶⁵）の認識」はあるのか。

athātmarūpaṃ no vetti pararūpasya vit katham |

このことは、すでに第 429 偈 abc₁ に述べられた⁶⁶。すなわち、「対象の認識」とは、対象形相をもった知が自身を認識する——自証する——とき、その対象形相を外境存在と執することである。これ以外に「対象の認識」は考えられない。したがって、知の自証性をみとめないかぎり、「対象の認識」は説明されえない。

敵者はこれに対して、知が対象と相似することが「対象の認識」と表現されるのであって、知の自証性にもとづいて「対象の認識」があるのではない、というかもしれない。しかし、

また、相似性にもとづく「(対象の) 認識」という表現は(不合

64) PVV, p. 250, II. 10-12: tathā hy arthākāras tāvat jñānakāle parisphuṭaṃ vedyamāno jñānasyātmā cet jñānam apy arthākāravad aparokṣam eva svabhāvata ity nānyavedyaṃ.

65) PVV, p. 250, I. 14: pararūpasya (偈) bāhyarūpasya.

66) PVV, p. 250, II. 14-15: 「げに対象形相をもった知を認識することなくしては、『対象の認識』はない、と（さきに）述べられた。」 (na hy arthākārajñānavedanam antareṇārthavedanam ity uktam.) これはおそらく k. 429 abc₁ を指しているであろう。

理であると)まさにさきに述べられた。

sārūpyād vedanākhyā ca prāg eva pratipādītā⁶⁷⁾ || (444)

知が対象と相似しているということをもって「対象の認識」と表現することについては、すでに第 429 偈 c₂——第 430 偈⁶⁸⁾ に言及され、否定されたところである。

いまさらに、それにつけ加えてつぎのようにいわれる。

知覚された二つのものについてのみ相似性が把握される。しか
るに、対象をさきに知覚したことがないのに、どうして(人
は)それと知との相似性を決知するであろうか。

dr̥ṣṭayor eva sārūpyagraho 'rthañ ca na dr̥ṣṭavān |
prāk katham darśanenāsyā sārūpyam so 'dhyavasy-
ati || (445)

そもそも二つのものの相似性は、たとえば双生子のように、両者が知覚されていて始めて知られるものである。しかるに、いかなる者にとっても、かれらの知覚以前に対象が知覚されることはありえない。また、知覚の時点には対象は滅している。したがって、対象は決して知覚されない⁶⁹⁾。それゆえに、対象と知との相似性が決知されることはありえない。

67) PV-k (II): prativarṇitā; PV-k (I), (III): pratipādītā.

68) PVV, p. 250, l. 19: prāptam samvedanam sarvasadr̥śānām parasparam (k. 430 ab) ity anena. Cf. PVP, 292 b⁶; PVT (R), 184 b⁷. なお cf. k. 321 c-k. 325.

69) PVP, 292 b⁶⁻⁷: 「白等の知覚の時点にも、対象は刹那性のゆえに滅していて(知覚されないで、結局)両方とも(=知覚の以前にも知覚の時点でも)知覚されないから、対象は決して知覚されることがない。」(dkar-po la-sogs-pa mthoñ-baḥi dus na yañ, don skad-cig-ma ñid yin-pas ḥgags zin pa ñid kyi phyir, gñis mthoñ-ba med-pas na, don ḥgaḥ-shig kyañ mthoñ-ba yod-pa ma yin no.)

法称にとって「対象の知覚」とは、知が自己にある対象形相を認識するとき、それを外境存在のように執することである。それは、外境対象そのものを直接に認識するのではない。

ところで、或る者は知の自証性のみならず、知が対象形相をもつことをもみとめない。いまその無形相論を破す⁷⁰⁾。

(知の自証性のみならず⁷¹⁾、対象と) 同じ相をもつことをも許さない者には、両方の認識 (= 知の認識と対象の認識) は (ありえ) ない。その場合、(対象と知について) 「対象である」, 「知である」, 「知られた」という表現が (ありえ) ないことになるう。

sārūpyam api nēcched yaḥ tasya nōbhayadarśanam |
tadārtho jñānam⁷²⁾ iti ca jñāte cēti gatā kathā || (446)

知が対象と同じ相をもつこと——対象形相をもつこと——にもとづいて、「これはこの対象の知である」といえるのであるが、もし知が対象形相をもつことをみとめないならば、どうして知が「対象の認識」でありえようか⁷³⁾。また、敵者は知の自証性をみとめないから、知それ自身も知られない⁷⁴⁾。したがって、対象も知も認識されないことになり、それゆえに「対象である」、「知である」という表現、あるいは「対象が知られた」と

70) PVT (R), 185 a²⁻³: 「もし『対象は形相をもち、知は形相をもたない。また、それ (= 知) が他の知によって把握されるとき、“(対象は) 知覚された”と決知されるのであって、知が (対象の) 相をもつことによるのではない。どうして過失があろうか』というならば、……」 (hon te don ni rnam-pa dañ ldan-pa yin la, śes-pa ni rnam-pa med-pa ste, de yañ śes-pa gshan gyis ḥdsin-pa na mthoñ-baḥo shes nes-pa yin gyi śes-paḥi ḥdra-bas ni ma yin na, gañ gis* na skyon du ḥgyur she na, …… *Peking ed. の gi を Cone ed. によって訂正。)

71) PVV, p. 251, l. 3: 「“も” という語によって、自証を (も許さないことを言外に含む。)」 (api śabdāt svasamvedanam.) Cf. PVT (R), 185 a⁴.

72) PV-k (I): jñātam; PV-k (II), (III): jñānam.

73) PVP, 293 a²: ḥdra-ba las don ḥdiḥi mthoñ-ba ḥdi yin-pa ḥgyur-ba de yañ yod-pa ma yin-pa de ltar na gañ las don rig-par ḥgyur. Cf. k. 432, k. 433 cd.

74) 知が他の知によって知られることもない。このことはすでに (k. 441 ff.) 述べられた。

か「知が知られた」という表現もありえないことになる。世間の人々はすべて盲人や啞者のようになるであろう⁷⁵⁾。

b 受は知にほかならないとみなす場合、自証性が証相される

以上、第 438 偈 cd, 第 439 偈に示された二つの見解のうち、認識者当人に鮮明に現われる「白等の現われを相とする受」がいわゆる「白等の顕現 (= 知)」と異なったものであるという見解（——逆に言い換えれば、「白等の顕現」といわれるものは、認識者当人に鮮明に現われる「受」とは異なったもの、したがって認識者当人に現われない不可見のもの、であるという見解——）について、その過失が指摘された⁷⁶⁾。

いま、もう一つの見解、すなわち両者は異なったものでないという見解について述べる。

もし（認識者当人に鮮明に現われる「白等の現われを相とした受」こそが知の）本質であるならば、その場合、それはまさに自ら現われる（といわれるべきである）。なぜならば、それが（自ら）現われないならば、対象も現われ（え）ないであろうから。

atha svarūpaṃ sā⁷⁷⁾ tarhi svayam eva prakāśate |
yat tasyām aprakāśāyām arthaḥ syād aprakāśitaḥ ||
(447)

もし認識者当人に鮮明に現われる「受」こそが「顕現 (= 知)」にほかならないのであれば、その「顕現 (= 知)」は自ら現われているものである。白等を知覚するとき、「白等」が認識者当人に現われると同時に、「受」——すなわち「顕現 (= 知)」——も現われているのである。なぜな

75) PVV, p. 251, l. 6: kṛtsnam jagad andhamūkaṃ bhavet. Cf. PVP, 293 a⁴, PVT (R), 185 b³⁻⁴.

76) PVP, 293 a⁴: 「以上、受が（『白等の顕現』と）異なったものである（とみなす）場合の過失が指摘された。」 (de de ltar na űams-su-myoñ-ba gshan gyi ño-bo yin-paḥi skyon bśad-pa yin no.)

77) PV-k (I): na; PV-k (II), (III): sā; PV-k (t): de (=sā).

らば、「受」すなわち「知」が現われないならば、「白等」も現われえないはずである⁷⁸⁾。しかもそれは自ら現われるのであって、他によって現われるのではない⁷⁹⁾。そして、「知が顕現 (prakāśa) を本性として自ら現われる」ことこそが知の自証性にほかならない⁸⁰⁾。

78) Cf. k. 440.

79) Cf. k. 441 ff.

80) PVP, 293 a⁶: 「自ら現われる, すなわち自証を本質とする。」 (rañ nīd rab-tu-gsal-bar ḥgyur, rañ-rig-paḥi ṅo-bo yin te. 下線は偈。) Cf. PVV, p. 251, ll. 12-13.

しかし、知は勝義に自己を対象として顕照（認識）するのではない。しかし、知は顕照を本性として自ら生じるから、比喻表現によって、「自己を顕照する——自証する——」といわれるのである (cf. k. 329)。